

タマリハ山崎先生に聞く!



第1号
発行所
多摩リハビリ
テーション学院

「これからは”脳”の時代！」

～恩師の言葉より～

伝えたいことを伝えられるように
する「きっかけ」を作ることが仕事

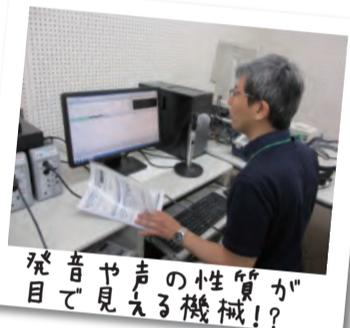
言語聴覚士(以下ST)は、コミュニケーションの橋渡しをする存在です。「話す、聞く、考える、読む、書く、食べる」ことが難しい方を支援します。当時はまだ珍しい、作業療法、理学療法、言語聴覚の3学科が揃った学校でした。その時出会った車椅子のSTの先生は「これからは「脳」の時代だ！」「言語聴覚士は今はまだ国家資格にすらなっていないが、今後必ず国家資格になる。この資格を目指すものは非常に少ないし、レアである。だからこそ、面白いんだ！」と熱く語っていました。「この先生についていきたい！」と直感的に思ったこと、脳の話に興味を持ったことがSTを目指すきっかけになりました。



この時点では「コミュニケーション」については、よくわかっていませんでした。「リハビリ」というものを初めて知りました。言語聴覚士はまだ国家資格にもなっておらず、認知度は非常に低い状況でした。そのため高校の先生からは、進路変更を反対されましたが、諦めきれず、その学校に入学しました。



「あっ、これどうやって使うんだっけ...」



「音声が機械で発音されるのって、聞き取れるかな?」



山崎先生って
こんな人

趣味はスノボ、スキー、熱帯魚、釣り、天体観測、ボルダリングと幅広く多趣味! 食べ物の好みはお寿司。特にブリと新鮮なウニが好き。猫舌でレアなお肉も好物。満員電車が嫌い。映画は好きだけど映画館は苦手。ジャンルはアクション、SF(幼少期に映画『ナビゲーター』に衝撃を受けた)を好む。アリの観察や苔が好き。水族館に行けば、その裏側まで見学するなど、興味を持ったなら止まらない! 会話のネタが尽きることがない、そんな山崎先生に会いに来ませんか?

印象にのこっている 患者様について

その男性は44歳の時、脳卒中を患い、右片麻痺と失語症が残ってしまいました。私と出会った当初は落ち込んでいて「ことばはどうですか?」と質問すると「ダメだね」と返し、後ろ向きになっていました。私はこの方が正しく話すことにはこだわりすぎているのではないかと感じました。高い理想は現実との差から自己嫌悪を生みます。「できる自分」を過小評価し、回復の芽を摘むのです。そこで、「顔を上げて話す」「笑う」「できること」を自覚する。「『できること』で意思表示する」を目標として、ご家族の協力を得ながら訓練を進めました。すると、会話ができたことを嬉しそうに話してくれました。失語症は、工夫次第でできることもあります。この方は小学2年生の娘さんに九九を平仮名で書き、音読して教えることができました。そのうち自分から「映画を観たい」、「路線バスに乗りたい」、「実家の母に会いに行きたい」、「マンガ喫茶に行きたい」などの目標を立てるまでに、結果は失敗に終わることも多かったが「ダメだったけど頑張る!」という前向きさが出てきました。

人と人との信頼関係を築くことと編集後記

先述の患者様に「教員になる」ことを伝えたと、「技術や知識よりも、人として向き合ってほしい」、「患者さんのことをしっかりと感じ取ってほしい」、「(患者さんと)寄り添いつつ提案をしてほしい」と言われたこと。技術や知識はもちろん大切だけど何よりも人と人との信頼関係を築いてほしいというメッセージが込められている。と、山崎先生。普段から多方向への知識が豊富で話題が尽きない方ですが、やはり専門の「脳」のことになると、右に出る者がいないくらい詳しいです。また、聴覚検査の方法を説明しようと機械を触りながら、「あれ?これ、どうやるんだっけ...」なんて、お茶目な一面も(笑)! 人間性豊かで素敵な先生です。

多摩リハビリテーション学院

作業療法学科・理学療法学科 (高卒3年課程) 言語聴覚学科 (大卒2年課程)

〒198-0004 東京都青梅市根ヶ布 1-642-1 TEL. (0428)-21-2001 FAX. (0428)-21-2410

